

平成23年度「重点研究費」研究成果報告書

申請区分	B	配分額	680,000 円
研究課題	比較地域研究の手法による移動民研究：事例の比較研究と教材作成		

研究代表者

氏名	出口 雅敏	所属	人文社会科学系人文科学講座	職名	准教授
----	-------	----	---------------	----	-----

研究分担者

氏名	吉野 晃	所属	人文社会科学系人文科学講座	職名	教授
	菅 美弥	所属	人文社会科学系人文科学講座	職名	准教授
	橋村 修	所属	人文社会科学系人文科学講座	職名	准教授
	水津 嘉克	所属	人文社会科学系人文科学講座	職名	講師

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字)

本共同研究の目的は、人類の普遍的活動として「移動」に着目し、学際的に事例を比較研究することを通じて、教材作成に資する資料・方法・課題を明らかにすることである。

近代国民国家は定住農耕民社会をモデルに形成されたため、移動する人々を例外的なものとして扱う傾向にある。しかし、往古より人類は狩猟採集民、遊牧民、焼畑耕作民、商人、職人、芸人、修行者、巡礼者等が生業や信仰に伴って移動してきており、近代では労働農民や出稼ぎ者、難民、疎開者として移動は続いている。こうした生業あるいは社会的要因による移動はむしろ人類の常態の一側面である。これまで、移動は特異事態に対する反応であると捉えられがちであった。だが、このように移動を常態と捉えることによって、定住民社会を前提とした社会像を相対化し、人類の社会文化史の組み替えができるであろう。以下、共同研究員の研究成果概要を述べる。

吉野研究員は、タイの焼畑耕作民ユーミエン（ヤオ）民族における焼畑耕作のメカニズムと、それに伴った彼らの定期的な移住経験が明らかにした。それを踏まえ、人類史における移動的生業の意義と、人類を「移動人 homo mobilis」と再定義することが提案された。

橋村研究員は、「カンダラ」と呼ばれる九州地方の漁場民俗を検討した。カンダラとは、船員や村人間での付随漁獲物の分配慣行であった。だが、明治以降の漁業環境の激変の中、カンダラは“盗み”として否定的に評価され衰退し始める。一方で、漁業に長けたよそ者、「旅漁師」を雇うために「カンダラ率」をあげて対応した諸所の事例も検討され、漁民移動とカンダラ慣行との結びつきが指摘された。

出口研究員は、南フランスを舞台に18・19世紀に大量出現した出稼ぎ労働者「ガヴァシュ gavach(e)」を検討した。ガヴァシュとは、この地域の民俗語彙であり、「よそ者」に対する侮蔑的呼称であった。しかし、安価な季節労働者として山人が大量に平地に下りてくるようになると、南フランスの各地域で、平地の村人たちはガヴァシュ呼称を「山人」に、とりわけ「近隣の山人」に結びつけながら否定的意味を急激に含意させていった点を明らかにした。

菅研究員は、米国センサスを対象に、19世紀後半の具体的な調査実態および調査原票を子細に追跡することを通じて、センサス上では見えない移民、エスニック・マイノリティ分類の曖昧さ、またその実数の不正確さについて検討した。具体的には、公式に「日本人」欄が表記される20年前の1870年センサスを題材に、「中国人」欄に登場する55人の「日本人」の実態について検証した。

水津研究員は、日本における外国人労働者の増加を、国際的な人の移動の高まりのみならず、国内的文脈から分析を行った。1980年代以降の急激な外国人労働者流入は、従来の出稼ぎ労働が国内間から国家間移動へと変化したものと把握できる。そして1990年代以降は、経済構造の変化と少子高齢化という2つの社会変化に対応するため、政府は、査定免除協定の実施や改正、日系ニューカマーの優先等、「選択的労働者移入」を実施してきた。その結果、日系ニューカマーの増加とその定住化が新世代の登場を促し、公教育の現場にも国際化を生みだしていると結論づけた。

研究成果発表方法

研究成果報告書『比較地域研究の手法による移動民研究』（2012年3月）